

修士論文（要旨）

2021年7月

高齢者の外出時における
初対面の人によるサポート授受の研究

指導 長田久雄 教授

老年学研究科

老年学専攻

219 J 6006

篠原 裕子

Master's Thesis (Abstract)
July 2021

Study of support from stranger when senior citizen go out

Yuko Shinohara
219J6006
Master's Program in Gerontology
Graduate School of Gerontology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Hisao Osada

目次

はじめに	1
第1章 研究背景	1
1.1 研究背景1 2025年問題と全世代型社会保障制度	1
1.2 研究背景2 インフォーマルなサポートのサポート源	2
1.3 研究背景3 高齢者の外出に関連する研究	2
1.4 研究背景4 高齢者, 障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律の改訂	3
1.5 先行研究	3
1.5.1 ソーシャルサポートの概念と本研究の位置付け	3
1.5.2 ソーシャルサポート研究の動向	4
1.5.3 先行研究文献	5
第2章 研究目的	6
2.1 研究目的	6
第3章 研究方法	6
3.1 調査対象者	6
3.2 調査対象者の選定理由	6
3.3 調査方法	6
3.3.1 調査期間	6
3.3.2 対象者の抽出方法	7
3.3.3 調査の方法	7
3.4 アンケートの内容	7
3.5 分析の手順	7
3.6 倫理的配慮	8
第4章 調査結果	9
4.1 調査対象者1 高齢者の基本属性	9
4.2 調査対象者2 学生の基本属性	9
4.3 調査対象者1 高齢者の老研式活動能力指標	9
4.4 公共交通機関利用時の調査結果の単純集計	9
4.5 商業施設利用時の調査結果の単純集計	9
4.6 街路における調査結果の単純集計	9
4.7 サポートの必要の有無についての性差の分析結果	9
4.8 サポートの実行の有無についての性差の分析結果	10
4.9 高齢者のサポートの必要の有無と学生のサポートの実行の有無	11
4.9.1 公共交通機関利用時における高齢者のサポートの必要の有無	11
4.9.2 公共交通機関利用時における学生のサポートの実行の有無	11
4.9.3 商業施設利用時における高齢者のサポートの必要の有無	11
4.9.4 商業施設利用時における学生のサポートの実行の有無	12
4.9.5 街路における高齢者のサポートの必要の有無	12
4.9.6 街路における学生のサポートの実行の有無	12
4.9.7 高齢者のサポートの必要の有無と学生のサポートの実行の有無の比較	12

5 章 自由回答の分析結果	14
5.1 内容分析結果(調査対象者：高齢者)	14
5.2 内容分析(調査対象者；学生)	17
第6章 考察	18
6.1 調査対象者の老研式活動能力指標	18
6.2 5件法による回答結果の分析からの考察	18
6.2.1 サポートの必要の有無についての性差の分析結果の考察	18
6.2.2 サポートの実行の有無についての性差の分析結果の考察	19
6.2.3 高齢者のサポートの必要の有無と学生のサポートの実行の有無の考察	19
6.3 自由回答内容分析結果からの考察	19
第7章本研究の限界と今後の課題	21
7.1 本研究の限界	21
7.2 今後の課題	21
謝辞	22
文献	i
図表	- 1 -
付録 ①	
自由回答原文一覧と暫定的コード一覧表	①

要旨

高齢者を支えるインフォーマルなソーシャルサポートのサポート源は高齢者がこれまでに何らかの関係性を育んできた身近な人々に焦点があてられて来たが、高齢者の外出時において初対面の人(公共交通機関や商業施設、街路などに偶然 居合わせた見知らぬ人)の対応が高齢者の安心感や快適さに及ぼす影響は大きく、不特定多数の人々にとって共通するサポート源になり得ると考える。

そこで本研究では従来のサポート源としての研究対象とはなっていない初対面の人に着目し、高齢者の外出時における初対面の人による円滑で効果的なサポートについて検討を行うことを目的とする。

一人で外出する機会のある75歳以上80歳未満の人100名(男女各50名)と18歳以上25歳未満の学生100名(男女各50名)合計200名を対象にwebによるアンケート調査を実施し分析を行った。

調査の内容は、はじめに、老研式活動能力指標13項目を使用し、調査対象者(75歳以上80歳未満の人)に日常生活の基本動作の状況について確認した。

次に、公共交通機関利用時、商業施設利用時、街路歩行時の3つの場面を想定し、各場面における具体的なサポートの例を提示して必要度について5件法と自由回答法により回答を求めた。

更に自由回答法により実際にサポートを受けた経験で望ましい場合と、望ましくない場合について回答を求めた。

調査対象者(18歳以上25歳未満の学生)に対しては、調査対象者(75歳以上80歳未満の人)の質問に対応した同様の場面とサポートにおいて、実際に行う頻度について5件法により回答を求めた。

次にサポートを行う際の判断について及びサポートを行った時の印象に残る出来事について自由回答法により回答をもとめた。

これらの調査より公共交通機関利用時において「座席をゆずられる」「ドア付近の手すりをゆずられる」ことと、商業施設利用時において「取りにくい場所にある商品を取ってもらう」ことを男性より女性の方が有意に多く必要としていた。

学生のサポートの実行の有無については「エレベーター利用時のボタン操作などをする」「手押し扉の開閉時に扉を開ける」「道案内をする」の3項目について女性の方が男性より有意に多く行っているという結果を得た。

また高齢者のサポートの必要の有無と学生のサポートの実行の有無の割合は公共交通機関利用時に「遅延情報など聞こえにくい駅のアナウンスなどを伝えてもらう」ことと商業施設においての「取りにくいものを取ってもらう」「荷物をつめたリュックを補助してもらう」の3項目を除く19項目すべてにおいて高齢者がサポートの必要ありと回答した割合を学生がサポートを行っているという回答した割合が上回る結果となった。

自由回答の内容分析の結果では、高齢者の回答は公共交通機関では【身体的機能の低下による困難が生じる】【特に不安を感じる場面がある】【公共交通マナー違反に困る】【サポートを望まない気持ちがある】の4カテゴリ、商業施設では【目的場所がわかりにくい】【苦手な場所がある】【視力低下により困難が生じる】【会計時の負荷がある】【支払方法の多様化により困難

が生じる】【サポートを望まない気持ちがある】の6カテゴリー、街路では【歩道でのマナー違反により困る】【横断歩道で不安を感じる】【サポートは不要である】の3カテゴリーが抽出された。

手助けで助かったことや嬉しかった事に関する回答は【困った時のサポートは必要である】【親切で丁寧な対応がありがたい】【サポートは不要である】【サポートされた経験がない】の4カテゴリーが抽出され、かえって困ったことや、不快に感じた事に関しては、【席を譲られた時に複雑な気持ちになる】【相手への気づかいによる葛藤が生じる】の2つのカテゴリーが抽出された。

学生がサポートを行う際の判断は【明確なサポートのニーズを察知する】【サポートが必要かどうかを察する】【周囲の状況により判断する】【自分の状況により判断する】【サポートが必要ない可能性を考える】【相手への気づかいをする】【断られた経験により影響を受ける】の7カテゴリー、高齢者に席を譲った時や、何かのサポートを行った際に、特に印象に残った出来事に関しては【感謝されることに感謝する】【断られた経験により変化する】【無意識にサポートする】の3カテゴリーが抽出された。

これらの結果、学生が高齢者に対し、高齢者が必要としている以上にサポートを行っている可能性が示唆された。高齢者にとって身体的な支障によるサポートのニーズはあるが公共交通機関、商業施設、街路いずれの場面においても「サポートを望まない気持ち」が併存していることが顕在化した。またサポートを望まない気持ちの中には、現在は健康であり、サポートの必要性を実際感じてはいないという意味のものもあった。「サポートを望まない気持ち」と「困った時のサポート」の2つの視点から理解を深めることが必要であることが確認された。

文献

- 中嶋 和夫・香川 幸次郎(1998)「高齢者の社会支援と主観的 QOL の関係」『社会福祉学』39 巻 2 号
- 豊島 彩・佐藤 眞一(2013)「孤独感を媒介としたソーシャルサポートの授受と中高年者の精神的健康の関係」『老年社会科学』35 巻 1 号 29-38
- 金 恵京・杉澤秀博・岡林秀樹他(1999)「高齢者のソーシャルサポートと生活満足度に関する縦断研究」『日本公衆衛生学会誌』46 巻第7号 532-41.
- 吉井 清子・近藤克則・久世 淳子他(2005)「地域在住高齢者の社会関係の特徴 とその後 2 年間の要介護状態発生との関連性」『日本公衆衛生雑誌』52 巻 6 号
- 坂口里美・福本久美子・中川武子他(2017)「地域在宅高齢者のソーシャルキャピタルとソーシャルサポートとの関連」『九州看護福祉大学紀要』Vol, 18, No1 ,51-61
- 柳澤 理子・馬場 雄司・伊藤千代子他(2002)「家族および家族外からのソーシャルサポートと高齢者の心理的 QOL との関連」『日本公衛誌』第 49 巻第 8 号
- 三浦正江・上里一郎(2012)「高齢者におけるソーシャルサポートの受領および提供とメンタルヘルスの関連－性別による違いに着目して－」『東京家政大学研究紀要 』第 52 週(1)pp. 41～46 20
- 山埜 ふみ恵・草野恵美子・吉田久美子(2020)「都市部における介護予防活動参加者間のソーシャルサポート授受バランス類型と近隣でのつきあいとの関連」『日本健康学会誌』86巻 6 号
- 澤岡詩野・古谷野亘(2011)「社会関係の研究において用いられている非家族との関係指標」『老年社会科学』第 33 巻第 1 号
- 澤岡 詩野・渡邊 大輔,・中島 民恵子他(2015)「都市高齢者の近隣との関わり方と支え合いへの意識」『老年社会科学』37 巻 (2015-2016) 3 号)藤田 幸司・藤原 佳典・熊谷 修他(2004)「地域在宅高齢者の外出頻度別にみた身体・心理・社会的特徴」『日本公衆衛生雑誌』51 巻 3 号
- Caplan,G.(1974).*Support System and community mental health*. New York; Behavioral Publications./近藤 喬一・増野 肇・宮田洋共訳『地域ぐるみの精神衛生』星和書店 1979 年
- 小林江梨香(2018)「高齢者の社会関係・社会活動」松田 修(編)『最新老年心理学』 p157 株式会社ワールドプランニング
- 島田今日子・山崎幸子・中野匡子他(2012)「同居家族からのソーシャルサポートが高齢者のうつ傾向発生に与える影響 5 年後の追跡調査」『老年社会科学』34 巻(2012-2013)3 号
- 福川 康之・坪井さとみ・新野直明 他(2002)「中高年のストレス及び対人交流と抑うつとの関連 家族関係の肯定的側面と否定的側面」『発達心理学研究』13 巻号
- 中島千織(2000)「高齢者のソーシャルサポートに関する探索的研究 個別面談データから」『名古屋大学大学院教育発達研究紀要 人文社会科学』52, 41-46
- 中田知生(2020)「高齢者における社会的ネットワーク」株式会社明石書店
- 林 暁淵・岡田 進一・白澤 政和(2007)「大都市独居高齢者の子どもとのサポート授受パターンと生活満足度」『社会福祉学』48 巻 2 4 号
- 飯田亜紀(2000)「高齢者の心理的適応を支えるソーシャルサポートの質: サポーターの種類とサ

ポート交換の主観的互惠性」『健康心理学研究』13 卷 2 号

菅原 健介・薊 理津子・幸田 紗弥華他(2009)「電車内における座席の譲与行動の規定要因
(1)(2)(3)『日本心理学会大会発表論文集』日本心理学会第 73 回大会

川村 竜之介・谷口 綾子・大森 宣暁他(2015)、「公共交通車内における協力行動と規範に関する国際比較」土木学会論文集 D3 Vol.71,No5 土木計画学研究論文集 32 卷 1511-1521

古谷野 亘,柴 田 博,中里克治,芳賀 博(1987)「地域老人における活動能力の測定老研式
活動能力指 標の開発」『日本公衛誌』 1987;34:109-114 11

高木亜希子(2011)「質的研究デザインの方法」第 41 回中部地区英語教育学会福井大会
英語教育法セミナー 2